

二重言語国家・日本

～以下、書評「二重言語国家・日本」(著者:書家 石川九楊) <評者:朝日新聞編集委員 河谷史夫> (朝日新聞 99.7.11) より～

(・・・・・・は中略部分。太字は引用者による。)

「私たちは、ある国に住むのではない」とシオランという人が言っている。「ある国語に住むのだ。**祖国とは国語だ。**それ以外の何ものでもない」・・・・・・「日本語の構造が明らかになれば、それは相似的に日本人の意識の構造を明らかに、世界の中における日本人位置関係を明らかにする」・・・・・・。太古、この弧島に住む人々の間では幾種類もの「前日本語(倭語)」が話されていた。無文字に時代。そこに大陸で生まれた漢字という文字が圧倒的な圧力でもって流入してくる。「文字の誕生」とは何事であるか。「文字が新たな語彙を生み、その語彙が言葉の中に漂流し定着し、文字が言葉の中に構造的に組み込まれ」て「言語の構造の転換をもたらす。それが「有史以来の文明や文化の展開を担った」。漢字の増殖は驚異的で「歴大なめくるめく言葉の宇宙」を生んだ。中国の唐、宋代が世界最高水準の文明と栄華を誇ったゆえんだ。弧島にあっては、**中国語の周囲に倭語が呼び集められて「和語(新生倭語)」ができた。**「植民地語」であり、もとは中国語に属する**漢語と、和語との二重言語たる日本語の生成は日本という国の成立過程に並行している。**・・・・・・六六三年白村江の戦後に弧島は「世界史的にも不思議な『敗戦建国』を果たし」たのち、一〇〇〇年ごろ「文化としての国・日本」が成った・・・・・・。